

# 子ども虐待を考える

## A Reflection on Child Abuse

和 泉 広 恵  
IZUMI Hiroe

【要旨】 子ども虐待はなぜ起きるのか。これまで子ども虐待の防止と対処について、リスクアセスメントを行ってハイリスクな親を支援するとともに安全性が確保できない場合は子どもを分離するという議論や、親という個人の問題とするのではなく社会が子育て家庭に充実した資源の投入をするべきだとする議論がなされてきた。これらの議論では、誰もが虐待者になりうるということが前提にされている。しかし、子ども虐待とは子どもに煙草の火を押つけたり、乳幼児を放置して餓死させたりすることであり、こうした深刻な子どもへの暴力がこれらの議論で説明できるだろうか。精神科医・高橋和巳は、虐待の原因として親の知的能力障害と被虐待経験を挙げ、8割が前者で1割が後者であるとする。高橋によれば、子どもの気持ちを読み取ったり推測したりすることができない認知機能の障害がある親は愛着関係を形成することができず、被虐待者である親は自己の存在の不確かさを経験し、自尊感情が低く、リアルな世界が欠落している。本論は、臨床経験から導かれた高橋のこの議論を、ジョージ・ハーバート・ミードが『精神・自我・社会』で展開したコミュニケーション論の観点から再考する。ミードは、他者への行為をしようとするとき、それが自己になされた場合の自己の反応を想起することが、人間のコミュニケーションの特徴であるとしたが、虐待に及ぶ親においては他者への行為が自己への想起とつながっていない。私たちはミード的なコミュニケーションを前提とすることで、被虐待者の世界も加虐待者の世界も理解できていないのではないか。この前提をはずして、虐待者と被虐待者のコミュニケーションの内容を分析することで、私たちは虐待とはなにかを根本的レベルで理解することができ、深刻な子ども虐待問題の解決に近づくことができるのである。

### 1. はじめに

なぜ虐待は起きるのか、不思議に思ったことはないだろうか。自分にとって辛いこと、痛いことをなぜ子どもにできるのか。経済的な理由、トラウマ、子育てのストレスなどが理由として挙げられるが、自身が貧困に陥ったら、育児のストレスを抱えたら、子どもに煙草の火を押つけるだろうか。3日間乳幼児を放置して餓死させるだろうか。なぜこんなことが起きるのか。この疑問に対して、本論では、親子のコミュニケーションに焦点を当てて論じていきたい。

虐待については、厳罰化の議論が生じている（目黒の例、柏の例がその直接的な動機づけになったことは疑いようがない）。その一方で、支援が必要との声も根強い。虐待親を罰したところで虐待はなくならない、むしろ虐待は隠蔽される、だから懲罰ではなく支援をするべきだ、という議論である。このほかに、諸機関の連携や情報共有などもなじみの議論といえるだろう。どうしても予防できるかをめぐるこうした議論が、福祉や法学の分野を中心に繰り返されてきた。<sup>1)</sup>

社会学ではどうか。代表的な論者は上野加代子である。上野は、最初の著作では構築主義の立場から「児童虐待」が社会問題化していくプロセスを丁寧分析し、1990年代以降これが急激に

問題とされ、法整備が進むなかで、家族への公権力の介入が正当化されたことを指摘した。さらにこれ以降、虐待は公権力の家族介入を進める結果となったことを主張し、特にリスクアセスメントに着目して、「母親」の理想からはずれる親を発見し、取り締まることが進んだと論じた。ここでいう「はずれる親」とは、「貧困」「被虐待経験」「シングルマザー」「行政やソーシャルワーカーに従順でない」などを指し、これらは虐待との因果関係についての明確な根拠が示されないまま、親個人の抱えるリスクとして「注意すべき対象」とされてきたのである。上野は言う。個人のリスクではなく子育てに必要な社会資源の欠如ととらえ、個人の問題というよりも社会の問題としてとらえないかぎり、虐待は防止することはできない、と。<sup>2)</sup>

ここで、2つの疑問がある。第一に、虐待を恐れ、育児相談をしてくる親と、深刻な虐待をしてしまう親を同様に扱ってもよいのか。煙草の火を押しつけ、それを子どもが悪いからだとする親、乳児を数日放置して死亡させる親と、育児がストレスだ、うまく子育てができないと助けを求めて相談機関を訪れる親を、虐待する親として一括りにするのは違和感がある。

第二に、その親が虐待を生じさせる原因は社会状況によるものだろうか。より具体的には、子育ての資源不足という理由は十分に説得的だろうか。貧困や育児ストレスは、多くの親に煙草の火の押しつけや放置による餓死を生じさせるだろうか。この単純な問いに対して、それは極端な例外と考えるべき、との反論もあるかもしれない。しかし、私たちは、子どもの虐待という事象を通して、このような「例外」の原因を知り、防止したいと考えてきたのではないだろうか。これらを単なる「例外」としてしまうことで、子ども虐待とはなにか、という問いに対する根本的な理解の機会を逃してしまうのではないだろうか。火傷やネグレクトによる餓死は、理想的な親像からの逸脱ではない。「多様な子育て」とは明確に区別されるべき、深刻な子どもへの暴力である。

では、なぜこのようなことが生じるのか。問いは再び振り出しに戻る。

ここで、近年注目を集めている虐待に関する議論に目を向けてみよう。精神科医の高橋和巳は、虐待についてこれまでとは異なる原因を挙げている。それは、親の知的能力と被虐待経験である。高橋によれば、虐待として取り上げられるケースの8割は前者で、1割は後者であるという。具体的に見ていこう。

虐待親の8割は、軽度知的障害、境界知能領域にあるという（高橋編 2019）。虐待親に共通に見られるのは、子どもとだけではなく、ソーシャルワーカーを含む周囲の人々とトラブルを起こし、安定した関係を築きにくいという特徴である。一方で、子どもの行動から感情を推測し、子どもを気遣う言葉をかけることができない。これらの行動には幼児性が示されているといってもよいだろう。

重要なのは、高橋がこの説に辿り着いたのが、虐待する親の特徴をとらえようとしたからではなく、被虐待者のカウンセリングによって生じた疑問からであったことである。高橋はうつ病などの理由からクリニックに来院した患者のうち、うつ病の薬が効かない人々が一定数いることに気づき、これに疑問を抱いた。これらの患者のカウンセリングを続けるうちに、患者に共通する傾向を見いだしたのである。患者は決して自ら虐待された経験があるとは語らない。むしろ親子関係には問題がない、良好であると語る患者すらいる。それでは、親のことをどのように語するのか。「良好」と語る関係の具体的な内容は、決して語られない。それでも時間をかけて記憶を辿っ

ていくと、患者自身のコミュニケーション上のかみあわなさ(齟齬)が目立っていることに気づく。

違和感の所在は、患者自身の言動やその背後にある感情を読みとることの欠陥である。単純に感情に起伏があるというのではなく、言動に一貫性がなく、子どもがそうした言動をどのようにとらえているのかということに対する推測がない。言動に論理性がないために、次の行動を予測することができない。なんらかの意図に基づく意志すら感じることをできない理不尽さがある。それでも患者は親の態度に対して不当性や加害性を訴えることはない。それは、カウンセラーから親の理不尽に見える行為をかばっているからではない。幼少期よりそうした環境に慣れている場合には、それが「普通」だと認識し、「理不尽」だと認識していないからである。より正確に言えば、「理不尽」を認識し、問題化することができないといってもよい。こうした患者に共通する特徴として、彼／彼女らは、感情にまかせて子どもを責めたてる親の言動をうのみにし、親を責める代わりに自分を責めることが多く、自尊感情が低いという。

高橋は、患者の語る親の理不尽さに、「それは虐待である」という自身の見解をつきつけるのではなく、患者の語るひとつひとつの言葉を受け止めることによって、親の一貫性のなさや幼児性を患者が認識するようになるまで粘り強く待つ。高橋の議論は、虐待する親の生得的な要因による知的な面での能力不足を指摘しただけでなく、そのことが子どもに与える影響について、愛着の形成という観点から論じた。この点について、本論では、コミュニケーションと自己という観点から論じていきたい。

## 2. 虐待者のイメージ

子ども虐待において、これまで虐待者はどのようにとらえられてきたのだろうか。ここでは、子ども虐待への対応から虐待者に対する認識を検討していきたい。

現在、子ども虐待の防止と対処について、多くの研究者や実務家の間で有効だと考えられているのは、親のリスクアセスメントを行い、ハイリスクな親には様々な支援を行うとともに、子どもの安全性が確保されない場合には、子どもを分離するという方法である。アセスメントを行うさい強調されるのが、独断では行わないということである。多機関による連携が強調され、複数の視点で判断することが重要であるとされている。もちろん、親とのかかわりは子どもの分離で終了するわけではない。子どもの分離が検討されている段階や子どもの分離後にも親への指導が行われ、改善がみられた場合には、子どもの分離が終了するという判断が行われる。

ハイリスクとはどのような場合を指すのだろうか。今日でも子ども虐待対応のマニュアルとして参考にされている、『子ども虐待対応の手引き』（日本子ども家庭総合研究所編 2014）を見ていこう。ここでは、保護者側の虐待に至るおそれのある要因として、以下の点が挙げられている(ibid.: 30)。

- ・ 妊娠そのものを受容することが困難（望まない妊娠）
- ・ 若年の妊娠
- ・ 子どもへの愛着形成が十分に行われていない（妊娠中に早産等何らかの問題が発生したことで胎児への受容に影響がある。子どもの長期入院など）

- ・ マタニティーブルーや産後うつ病等精神的に不安定な状況
- ・ 性格が攻撃的・衝動的、あるいはパーソナリティの障害
- ・ 精神障害、知的障害、慢性疾患、アルコール依存、薬物依存等
- ・ 保護者の被虐待経験
- ・ 育児に対する不安（保護者が未熟等）、育児の知識や技術の不足
- ・ 体罰容認などの暴力への親和性
- ・ 特異な育児観、強迫的な育児、子どもの発達を無視した過度な要求、等

ハイリスクな要因をもつ保護者には、どのように対応すべきだと考えられているのであろうか。ここでは、保護者に対する「支援」が強調される。たとえば、「リスク要因を早期から把握して支援につなぐことが虐待の発生予防につながる」(ibid.:29)とされている。また同書は、『健やか親子21 検討会報告書』から、「援助者が虐待する親の相談相手になることは、虐待者の社会的孤立を無くすことになり、そのときから虐待は軽減される。そしてあらゆる社会資源を導入して生活のストレスを軽減し、もし、子どもの健康問題がある場合には、親の負担をかけることなく改善し、再発防止する。このような育児支援を、出生直後から、親に対して行うことにより、虐待の予防につながると言われている」という箇所を引用し、参考にすべきであると指摘している(ibid.:31)。「リスク要因を早期から把握して支援につなぐ」ために具体的に示されるのは地域の子育て支援策であり、具体的には、妊娠期からの支援や孤立を防ぐ子育て資源の活用に加えて、保護者の虐待経験を理解しサポートするなどによって「安定した子育て」につなげることである。

保護者への「支援」を強調する背景には、単なる子育て支援以上に重要な意図がある。それは、虐待を行う保護者に「虐待」を自覚させ、「振り返る」機会を与え、態度を改めさせるということである。同書は一方で、虐待者には「適切な時期に適切な形で虐待の告知を行い、子どもの養育についてともに考えるよう促し、具体的な援助につなげる必要がある」と指摘する。その一方で、「保護者が自らの行為を虐待であると自覚するのは想像以上に困難であり、虐待を認めるにはかなりの勇気が必要である」(ibid.:63)とし、援助者は保護者を非難するのではなく、保護者の気持ちに寄り添い、理解しながら、「正しい」認識を持つよう指導することが求められると指摘する。ここでは、保護者の「気づき」や「振り返り」を促す援助の姿が強調される。「虐待の告知」では、「援助者は虐待と問題行動等の関係を十分吟味し、まずは保護者自身がそうした関係に気づくよう援助することを心がける。虐待の告知は、そうした保護者の状況をふまえて、その後の援助につながるように行わなければならない」(ibid.:65)とされる。また、親子が分離される場合には、「入所理由を子どもの問題行動や養育困難といった点にしぼって説明すると、保護者自身が自らの養育態度について振り返ることができず、指導や援助にも困難をきたし、保護者側の都合で家庭引き取り要求が出されても適切に対応できなくなるおそれがあるので、注意を要する」(ibid.:65)とし、援助者は保護者の行為を「虐待」であると気づかせ、自ら「養育態度」を改めることができるよう促すことが重要であると指摘する。

援助者が虐待者をどのように「援助」することになるかについて、ここで述べられていることを次のようにまとめることができるだろう。虐待者の自覚を促してだけでなく、安定した子育てにとって必要な支援、たとえば地域の子育てサポートや一時保育を行う。虐待者を責めな

い。虐待者の育児の良い点を褒めたり、その手助けをしたりする。場合によっては、カウンセリングにつなげたり、経済的な困窮があれば行政の制度を利用した支援を行ったりする。もしそれでも虐待が止まらない場合には、一時保護をしたうえで、親が自身の行為を改めて虐待のない子育てをする可能性が出てきた場合には、家族再統合を目指す。そのように導いていくのが援助者の役割だと考えられている。

### 3. リスクアセスメントを中心とした子育て支援への批判

では、社会学では虐待対応はどのようにとらえられているのだろうか。子ども虐待の社会問題化をいち早く指摘した上野加代子は、リスクアセスメントを中心とした子ども虐待対応について批判している。上野は、ハイリスクな親を洗い出すという行為自体が特定の養育者をスティグマ化することにつながると指摘する。

母子保健の専門家が作成したいいくつかのリスクアセスメント表をみていくと、「母子家庭」「母若年」「母性意識」「母親の訴えが多い」「高齢出産」など、母親だけに関連する項目が多数をしめる。「望まぬ妊娠」「妊娠・出産のストレス」「育児ノイローゼ」「家事能力不足」「抱き方がぎこちない」「育児知識の不足」なども、主に母親を想定した項目である。

こうした項目が、母親としての望ましい生活スタイルや態度についての、アセスメント表作成者自身の価値観を反映するものであることはみやすいであろう。(上野 2007: 36)

上野は、たとえば、シングルマザーや経済的困窮を抱えた家庭の女性が虐待者になる可能性が高いとし、行政が重点的に監視することによって、虐待が個人の問題としてとらえられてしまうことを懸念する。上野はこうした見方とは異なり、虐待は育児をしている親に対する社会資源の不足に原因があるのとらえている。そのため、上野が必要だと主張するのは、個人の監視ではなく、社会の子育て家庭への充実した資源の投入である。特に、虐待と貧困問題は結びついていることが知られているため、経済的困窮をなくすことが虐待を減らすことにつながると指摘する。問題は、「社会経済的な問題であるはずのものが、個人の問題であるとされ、個人によって回避されるべきという前提をとっている点にある」(ibid.: 39)。換言すれば、上野は虐待を個人の抱えるリスクとしてとらえるのではなく、社会全体の課題としてとらえ、制度面等の改善から虐待問題を理解するという視点に立っていると言えるだろう。

### 4. 誰にでも起こることなのか

これまで検討した議論では、誰もが虐待者になりうるということが前提とされていた。『子ども虐待対応の手引き』では、リスクを抱えれば虐待者になりうると考えられており、上野の議論では、社会資源の不足が虐待を生み出していると考えられている。しかし、それは本当だろうか。

筆者がここで紹介したいのは、精神科医の高橋和巳の議論である。高橋は、虐待の原因を個人の知的能力と関連づける。著書『「母と子」という病』で高橋は、母親には以下の3つのタイプが



あると説明する。すなわち、①豊かな愛着関係がある母親、②愛着関係が不十分な母親、③愛着関係を作れない母親、である(高橋 2016: 54)。彼はそれらを、A (Adult) タイプ、S (Sub-adult) タイプ、D (Disability) タイプの母親と名づけて、次のように定義する。

- A タイプの母：子との間に正常で豊かな愛着関係を作ることができる（正常成人の母親）  
母親は、親としての責任を持ち、子の気持ちを理解し、十分に甘えさせることができる。  
子どもは、失敗しても安心して積極的に公園で遊び回る。愛着障害はない。
- S タイプの母：子との間に愛着関係を作れるがそれが不十分（親として未熟な母親）  
母親は、子の気持ちを理解するが、子をあまり甘えさせない。  
子どもは、少し母親を気にしながら、気をつけて公園で遊ぶ。愛着障害はない。
- D タイプの母：子どもとの間に愛着関係を作ることができない（人間理解に障害のある母親）  
母親は、子の気持ちを理解できず、継続的な母子関係を作れない。  
子どもは、公園に連れて行ってもらえず一人で遊ぶ。愛着障害が生じる。(ibid.:54-5)

高橋は、自身の臨床経験を踏まえて、3タイプの分布割合、心理発達段階、特徴、子どもの愛着障害の有無を以下のようにまとめている。

#### 親としての責任をもつ標準的な母親〈Aタイプの母親〉

読者のうちのほとんどは、Aタイプの母親の下で育った「子」であろう。母親の約90パーセントがこのタイプである。

母親は子どもの気持ちをよく理解し、子に対して一貫した態度をとることができ（対象関係論・対象恒常性）、また子どもが何かを訴えれば、母親はそれをよく理解し応えてくれる（自己心理学・共感的応答）。逆に言うと、世の中の90パーセントの人は甘えを知っているし、母親はいつもまでも甘えられる存在だ。

Aタイプとは、「正常成人」の母親という意味、すなわちAdultの「A」をとって名づけた。(ibid.:57)

#### 親になりきっていない未熟な母親〈Sタイプの母親〉

Sタイプは、母親の中で3パーセントくらいである。この割合は、高橋の臨床経験からの推定値とされる。

Sタイプの母親は子どもとの間に愛着関係を作ることができるが、それが「不十分」である。あるいは方向が間違っていて、子どもと仲良くできるが友だち同士の様な関係が強く、最後の最後に、親として、大人としての責任を回避することがある。このため、子は「甘えようとしてあるところまで母親に近づくと、最後に拒絶される」あるいは「無視される」という体験を持つ。それが、子の緊張と不安の元になっている。

子が小学生頃まではあまり問題を起こすことがないが、思春期に到って、子は多に悩むことになる。その頃、母子が高橋のクリニックを訪れる。摂食障害や不登校問題である。

母親として精神的に未熟、成人になりきっていないという意味で、Sタイプ、すなわち、

Sub-adult、あるいは学童期（School age）の「S」をとって命名した。学童期とは人生の心理発達を8段階に分けて説いたエリクソンの心理発達理論（『幼児期と社会Ⅰ・Ⅱ』）で、大人になる前の段階として説明されているものである。(ibid. :58-9)

#### 対人理解に障害がある母親〈Dタイプの母親〉

Dタイプの母親は、全体の5パーセントくらいである。この値は生物学的、統計学的な推定値である。

Dタイプの母親には、認知機能の障害がある。そのために、子どもの気持ちを読み取ったり、推測したりすることができない。子どもだけでなく他人の気持ちもわからないので、対人関係でトラブルを起こしやすい。他人や子どもの気持ちを読み取るという作業は、「自分を相手の立場に置き換えて、そこから相手の気持ちを推測する」という心理的に高度な作業が不可欠だ。この作業には「社会的領域の知能」（DSM- 5『精神疾患の診断・統計マニュアル』）が必要であるが、Dタイプの母親はこれができない。精神医学的に述べれば、ごく「軽度」の知的能力障害（一部、境界知能領域を含む）がある。母親にこういった「障害」がある場合には、愛着関係の形成に問題が生じ、子どもの正常な心理的発達が阻害され、愛着障害が生じる。

Dタイプの「D」は、disability（障害）という意味である。

知的能力障害についての誤解を避けるために付け加えておくと、社会で一般に「知的能力障害」と理解されているのは中等度から重度の知的能力障害で、彼らは社会の支援を受け、保護的な環境（家庭・施設・作業所など）で生活している。しかし、ここで問題にしているごく「軽度」の知的能力障害は、その中には含まれておらず、社会でほぼ自立的な生活を送っている。また、この程度の知的能力障害が診断されることも少ない。(ibid. :59-60)

#### その他の母親タイプ

その他には、3つのタイプに入らない残り2パーセントの母親がいる。すでに述べたように、重い精神障害がある母親で、統合失調症や躁うつ病がそれにあたる。統合失調症の発症は人口の約1パーセントで女性はその半分の0.5パーセントになる。これらの場合、母親の病気の発症時期、その時の子の年齢、家族環境によって愛着が形成されるか否か、またその内容が変わってくる。母子関係は複雑な経過をたどるので本書では直接関わりないが、ほぼDタイプに準じると考えていいだろう。(ibid. :60-61)

つまり、高橋が論ずる虐待の主な原因は、養育者のハイリスクの環境でもなければ、経済をはじめとした社会資源の不足でもない。「知的能力障害によるものである」と指摘するのである。この議論の特徴は、虐待が虐待者への寄り添いや認識の変化によって改善するわけではなく、さらには、社会経済的支援などの社会の問題として捉えることによっても解決しない問題であると指摘していることである。

ここで、深刻な虐待について考えてみたい。第1節で述べたように、われわれは、煙草の火を子どもに押しつける、シャワーを浴びせて子どもを死に迫いやる、長時間屋外に乳幼児を放置す

るなどといった虐待が、環境的要因や社会資源の不足といった点から説明されることに納得できるだろうか。多くの人は疑問を感じるだろう。こうした行為は、すべての人が状況によって陥る可能性があるものではない。そのように考えれば、環境的要因や社会資源の不足は深刻な虐待の原因にはなっていないのではないか。こうした事例がもし高橋の指摘するように知的能力の問題と深く関連しているとするならば、彼の議論はかなり多くの点でこれまでの虐待の視点とは異なる視点を提供していると言えるのではないだろうか。

## 5. 被虐待者の世界

特筆すべきことは、高橋の議論が被虐待者との対話から導かれていることである。高橋は著書『消えたい——虐待された人の生き方から知る心の幸せ』において、被虐待者との対話を次のように理解する。

被虐待者に共通に見られる心理的な特徴から、私は彼らを異邦人と呼んだ。

彼らは、他の大多数の普通の人と同じ社会の中に生き、その社会の共通のルールである「社会的規範」を理解し、それを守って生きている。しかし、他人と感情を共有できないために、安心を知らず、人を信頼できていない。たとえて言えば、彼らは別の星で生まれ育ち、地球で生活するためにやってきた。社会のルールを詳しく教え込まれたが、心の交流の仕方がまだ分からないので不安で孤立している。そんな異星人のようである。(高橋 2014: 85)

異邦人（被虐待者）が生きている「辺縁の世界」では、社会的存在はいつも不安定である。彼らはその確信を持ってない。それ故に、「普通の世界」では「地」に退いている生命的存在が、「辺縁の世界」では顔を出している。彼らは二つをどちらも曖昧に感じ、迷っているのだ。それが彼らの不安である「存在の不確かさ」であり、また社会にとらわれない異邦人性でもある。

「普通の世界」＝心理カプセルの内側の世界に生きる普通の人々の存在感と、「辺縁の世界」に生きる異邦人とのそれを比較しながら、相対的と絶対的な二つの存在のあり方を明らかにしていこう。(ibid.: 227-8)

高橋の議論によれば、被虐待者は単に自尊感情が低く、トラウマを抱えているだけでなく、その根本にはリアルな世界というものが欠落している。それにより、自己への確からしさもまた十分に得られていないといえる。被虐待者の親の共通点として、親の他者に対する関心の低さがある。

第3節で述べたように、上野は経済的困窮が虐待の原因であるとする。しかし、なぜ経済的困窮に虐待者が陥るのかという説明がない。高橋の議論は、この理由をすぐに解決することができる。なぜならば、知的障害者は経済的に高い職業や地位に就くことができないからである。



## 6. ミードのコミュニケーション

以下では、高橋の議論をコミュニケーション論の観点から再考してみたい。社会心理学者ジョージ・ハーバート・ミードの『精神・自我・社会』を見てみよう。

ミードが本書で、セルフありきの議論を否定し、関係性がセルフを形成すると主張したことはよく知られている。ミードが繰り返し主張しているのは、他者とのコミュニケーションでは、自己が想起する反応と同様の反応を他者が想起すると想定されること、他者への行為が自己への行為と想起されることが人間の特徴である、ということである。引用しよう。

個人は、自分自身とジェスチャー会話を行うようになる。彼はなにかを言うが、それが彼自身のなかに特定の返答を呼び起こし、この返答が、彼が言おうとしたことを変更させるのである。ある人がわれわれが不愉快なことと思うだろうなにかを言い始めるが、言い始めたとき、その人はそれが残酷であることに気が付く。彼が言っていることの彼自身との間のジェスチャー会話がある。有意味な話ということで、われわれは、話すという行動がその個人自身に影響を及ぼす行動であること、個人自身にたいする影響が他者との会話を知的に遂行することの部分であることを意味する。(Mead 1934=1995: 176)

私たちは通常、このようなコミュニケーションを他者とのコミュニケーションとして想定している。他者に何か伝わったと感じるのは、ミードのいう、他者への行為が自己への行為を想起されると感じるからである。もちろん、私たちは他者に対して自分の発したメッセージが伝わらなかった（あるいは誤って伝わっている）と感じることがある。たとえば、会話をしていた相手の顔にパンくずがついていたとして、気になって凝視していると、相手に好意があると勘違いされるかもしれない。しかし、それは、コミュニケーションが不全なのではなく、想起が間違っていたにすぎない。これに対して、能力上の問題から虐待に及ぶ親の場合には、他者への行為が自己への想起へとつながっていない。そのため、自身の欲望を叶えることが他者に及ぼす影響を推測することができないのである。煙草の火を子どもに押しつける親は、同じ痛みを自身に感じるができない。乳幼児を放置して餓死させる親も同様である。

映画『愛を乞うひと』（1998年、平山秀幸監督）は、虐待の本質を見事に描いた映画である。子どもの顔がはれて同級生にからかわれるほどたく母親は、子をたくとき手が痛いために棒を使用する。たたいた子の血が飛び散ったとき、ドレスが汚れてしまったと激怒する。子どもが、母が自分を施設から引き取った理由はかわいかったからではないかと涙を流して尋ねるが、母は「あんたはじゃまだった、いらなかった」と平然と言いつつ。この一連の母の態度は自身の感情にきわめて素直であり、子どもがそれをどう思うかという推測はない。この意味で、この母親は、子への行為が自身に同様のことを想起するというプロセスがなく、自身の欲望にのみ忠実であるといえる。

ところで、被虐待者はこうした親との関係によって、どのような影響を受けるのだろうか。高橋は著書『消えたい』で、「世界」をもっていないクライアントを詳述している。クライアントは、多くの人がもつ同じ世界に対する確かな感覚がない。被虐待者であるクライアントは「死にたい」

ではなく「消えたい」と語る。「死ぬ」とは主体が行うことである。しかし、この被虐待クライアントには主体がない。

このことを、ミードの議論に照らして考えてみよう。ミードは、他者とのかかわりのなかで「一般化された他者」としての「me」ができ、これに反応して「I」ができ、この両方がselfを形成すると語る。被虐待者の場合、自己を構築する幼少期の親との関係において、この学びがくじかれる。「me」を教わることができず、確かなselfは形成されない。被虐待者は自尊感情が極めて低いといわれているが、selfの形成過程に問題を抱えているため、私という行為の主体が確立できないと考えれば、それも納得できる。高橋は、被虐待者は過剰な我慢強さで義務を遂行しようとする特性をもつことを語る。たとえば、ブラック企業で到底達成できないだろう営業ノルマを与えられたとき、自身の体調を一切顧みることなくノルマを達成しようとする。これは端から見れば、出世欲が強い、上司に褒められたい、能力を誇示したいなどの解釈がなされるが、当人は課されたミッションは完璧にこなさなければならないという義務感で行動しているに過ぎない。それはmeとIの対話の結果ではないのである。

さきほど、虐待する親の10%は被虐待者であるといわれていることに触れた。それでは、被虐待者が虐待にいたるのはなぜだろうか。被虐待親においては、meとIの対話がうまく機能していない。その結果、与えられたことをただ完璧にこなさなければならないという義務感に突き動かされる。子育てが親である自分に与えられたミッションである。しかし、育児は思い通りにならないことの連続である。それを完璧に遂行しようとしたとき、無理が生じる。そのさい、そこから一時でもおけるといことは許されない。子どもとの対話（非言語コミュニケーション）が必要になるが、そのコミュニケーションにも挫折してしまう。厳しさが虐待につながることもある。しかし、相手への行為の結果と同様のものを自分のなかに想起する能力がないわけではない。厳しくしてしまうことを後悔したり、自分を責めたりするということが生じるのである。高橋はこの点について、こうも述べる。被虐待者は甘えが許されない人生を生きてきた。だからこそ、子どもの甘えを受け入れることが難しい、と。子どもの甘えを、かわいいと受け止めたり、いら立って怒るよりも、なぜ甘えることができるのかという疑問の方が大きく生じたり、甘えさせてはいけないという義務感の方が勝ってしまうのである。

もうひとつ、解離という病理現象がある。解離はまさに自己の意識を喪失することである。受け止めがたい現実に対して、意識を消失しながら行為してしまうことであるが、self=meとIの対話がうまく機能しない場合、主体を失う。解離中の記憶はなく、気づけば血だらけの子どもがいるということがある。これもまた、selfの対話がうまく働かない場合に、容認できないストレスが生じる出来事に遭遇したときに、自己の防衛機制として働く心理メカニズムだといわれる。

「虐待－被虐待」をselfを形成する能力がない親（その能力に欠ける親）と、そのもとで育ったIとmeの対話によるselfの形成に支障が生じるという組み合わせで考えることで、なにがわかるのだろうか。それは、被虐待者が生きる世界である。

私たちは、多様性などの言葉で、寛容に多くの親の関係性（特に逸脱者（マイノリティー）の）を理解するよう努めているように思いこんでいる。しかし、虐待が教えてくれたのは、かえってその結果、私たちが被虐待者の理解不足に陥っているということである。私たちは、meとI=selfというコミュニケーションが成立しているミードが示した世界を前提に物事を理解しようと

している。その結果、被虐待者の世界者も加虐待者の世界も理解できていないのである。ミードのいうコミュニケーションの成立を前提としていると、彼／彼女らにどれほど真摯に耳を傾けていても、その返答をある前提で解釈しようとしてしまう。しかし、別のメカニズムから耳を傾けると被虐待者の世界への理解に大きく近づくことになる。

高橋は、被虐待者に「親の未熟者」というカウンセラーの見方をはじめから与えるのではなく、被虐待者が親の行為を語れるように、ただ寄り添うということを述べた。それによって、被虐待者が親との関係を距離をとって見つめることを目指すのである。しかし、このカウンセリングには続きがある。高橋は、被虐待者が親との相互作用についてかなりの程度見つめることができるようになったら、最終的に親の能力上の未熟さを指摘し、その認識の共有を図る。虐待の理由について納得したとき、クライアントは急激に変化を見せるという。それは換言すれば、selfの獲得への一步をクライアントが踏み出したといってもよいかもしれない。ミードのコミュニケーションの成立不足（能力不足による）によって自身が影響を受けた結果である、という認識は、能力不足という「親」に対する「me」の理解を成立させる。そしてその「me」があることによって、「I」が生まれる余地が生まれる。その時点で、親の理不尽なコミュニケーションに巻き込まれることがなくなるのである。被虐待者に被虐待者であるという認識が生まれるのは、このときからである。

被虐待者は虐待されているという認識を持つこと自体が難しい。一方、加虐待者は自己の被害を事実よりも過大に訴えることが多い。しかし、生得的な能力不足やそれによるコミュニケーション不足を想定していない私たちは、ミード的な意味での「常識」から、こうした逆転を疑うことすらできない。そのために、虐待関係者（加虐待者－被虐待者）に深くかかわろうとすればするほど、虐待についての理解から遠ざかるのである。しかしいったんこの「常識」をはずしてみると、驚くほどなにが起きていたのか見えてくる。すべての出来事が、逆にとても整合性をもっていることがわかるのである。

## 7. むすびにかえて

これまで子ども虐待問題は、その環境に応じて、誰もが陥る可能性があると考えられ、ハイリスクの人々のリスト化が行われたり、特定の人々に対する社会資源の不足が指摘されたりしてきた。しかし、コミュニケーションという観点から虐待問題を見直した場合、異なる様相が見えてくる。

虐待の防止に必要なのは社会資源ではなく、虐待者と被虐待者のコミュニケーションの内容を分析することであり、被虐待者の世界をこうした観点からとらえてくると虐待の根本が浮かび上がってくる。その結果、子ども虐待、特に深刻な子ども虐待の問題の解決に必要なのは、社会資源の整備でもなければ、ハイリスクの親のリスト化でもなく、虐待者の知的能力障害というある意味ではこれまでタブーとされてきた領域に真正面から向き合うことではないだろうか。<sup>3)</sup>

高橋は、被虐待者を「異邦人」と名づける。われわれは異邦人である被虐待者の世界を知的能力の問題を抱えない多数派の視点から理解したつもりになっていたように思われる。もしそうであるならば、今一度、虐待を受ける側の世界がどのようなコミュニケーションの学習から成り立っているのかを知ることが必要であろう。<sup>4)</sup>

## 付記

本稿は、2020年3月22日に逝去した和泉広恵が生前に行った口述筆記の記録に、論文構想ノートに記された内容を加筆して論文化したものである。口述筆記および注と文献表の作成は坂野嘉昭が、加筆と全体の調整は奥村隆が行った。

## 注

- 1) 福祉や心理、法学などの分野では、児童虐待防止法施行10周年やその改正の議論が盛り上がったりと、虐待死亡事案などが顕著になったりすると、児童虐待防止対策の推進に関するそれぞれの分野の連携や関与が説かれる。たとえば、「児童虐待防止対策の推進について一見すごすな 幼い子どものSOS—児童虐待防止法施行10年を迎えて」という特集が『厚生労働』2010年11月号(pp.4-10)で組まれ、看護、福祉、心理の分野からさまざまな予防策が説かれている。法学分野では、虐待防止の司法とのかかわりが多く説かれる(たとえば、稲毛(2018)、濱田・藤田(2018)、土居・高橋・安井(2018)、峯元(2019)などを挙げることができる)。また、精神医療の分野でも、児童虐待に対する養育者支援の立場から、いくつかの論稿が出されている(たとえば、山下(2018)、馬場・白田(2018)、菊地(2018)、森田(2018)など)。看護の分野では、中板(2017)は「子育てに悩まざるを得なかったあるいは、虐待に至らざるを得なかった深い苦しみを看取り、養育能力の低い傷つきやすい親たちが、こころのドアを開けてくれる姿勢、技術を私たちは共有し、より密な連携に活かしたい」という(中谷2017:37)。
- 2) 上野(2007)は、本文で触れるように「むしろ社会的経済的な問題であるはずのものが、個人によって回避されるべきという前提をとっている」と述べる(上野2007:39)。また、上野(2011)では、児童虐待は貧困問題・格差問題と関連し、その解決には子育てサービスでの対応が確実であり、「いままでは、子育ては『個人の問題』『家族の問題』であると考えられ、母親が苦勞しながら無償で担うことが当然視されてきた。それをあてにした国の子育て政策の欠陥を、親が負担するしくみになっている」、しかし本来、「子育ては社会のメンバーを育てるという重要な仕事であり、社会全体の問題であるから」、「社会保障で確実に対処するのがあるべき姿である」と支援のあり方に言及している(上野2011:86)。
- 3) このため、支援者に求められる子ども虐待への対応も従来とは異なるものになる。支援者は、親(加害者)の「見立て」を作る力の養成が求められる。つまり、親によって対応の仕方も緊急性も異なるため、正しい親の見立てこそが最大の虐待防止対策となるのである。そのためにも、親の家族の情報、親の能力を確認する問いをするなどの見立てに必要な情報を集めることが喫緊の課題となる。見立ての目的は、親が「軽度」知的能力障害があるかどうかを見極めることである。これにより、ケースワークや援助方針が大きく異なってくる。そこで、見立てに関するトレーニング・見立てを前提としたケースカンファレンス等の実施なども有益となる。その結果、児童福祉の現場で問題となっている職員のバーンアウトの予防にもつながることになるだろう(高橋編2019:140)。
- 4) このような視点に立つと、コミュニケーションの取れない親への対応は、①親とは敵対せず、関係を悪化させない、②子どもに直接、かかわり、支援をする、③親の養育能力を判断し、危険があれば、子どもを保護する、以上の3つのようになる。①については、支援を強く勧めることで敵対し、関係が切れてしまうことを防ぐという考えに基づく。②は、子どもが親に持っている違和感を共有することによって、子どもに寄り添いながら、子どもを支援していくという立場である。また、このような親の下で虐待を受けて育った親への対応としては、①親の困難さへの理解を示す、②親が休息できる子育て支援をする、③可能であれば、親のカウンセリングを行うなども考えられる(高橋編2019)。

## 引用・参考文献

- 馬場俊明・白田謙太郎, 2018,「周産期メンタルヘルス——産後うつ病と児童虐待との関連を中心として」『臨床精神医学』47巻9号, pp.983-991.
- 土居聡・高橋直紹・安井飛鳥, 2018,「児童相談所における弁護士の関わり」日本弁護士連合会編『自由と正義』2018年3月号, pp.21-30.
- 濱田雄久・藤田香織, 2018,「児童虐待における司法判断と求められる司法関与」日本弁護士連合会編『自由と正義』2018年3月号, pp.15-20.

- 稲毛正弘, 2018, 「児童福祉法・児童虐待防止法の概要と近時の改正について」日本弁護士連合会編『自由と正義』2018年3月号, pp.11-14.
- 磯谷文明, 2017, 「児童虐待の現状と改正法の意義」『法律のひろば』2017年12月号, pp.4-30.
- 菊地祐子, 2018, 「児童虐待の対応」『臨床精神医学』47巻9号, pp.993-998.
- 増沢高・福井充, 2019, 「英国における Children's Social Care (CSC) と警察・司法の関わり」日本子ども虐待防止学会編『子どもの虐待とネグレクト』第21巻第3号(通巻第57号), pp.307-321.
- Mead, George Herbert, 1934, *Mind, Self and Society: From the Standpoint of Social Behaviorist*, University of Chicago Press. = 1995, 河村望訳『精神・自我・社会』人間の科学社。
- 峯元耕司, 2019, 「虐待防止における司法の関わり——弁護士・スクールロイヤーに期待されること」『月刊自治研8』vol. 61 (no. 719), pp.33-43.
- 森田展彰, 2018, 「児童虐待加害者にどのように働きかけるか?——リスク要因の評価と援助関係の確立を中心に」『臨床精神医学』47巻9号, pp.1011-1019.
- 中板育美, 2017, 「児童虐待の予防のための妊娠期・保護者支援の体制と姿勢」『法律のひろば』2017年12月号, pp.31-37.
- 日本子ども家庭総合研究所編, 2014, 『子ども虐待対応の手引き』有斐閣。
- 大貫拳学・藤田智子, 2012, 「刑事司法過程における家族規範——DV被害女性による夫殺害事件の言説分析」『家族社会学研究』24巻1号, pp.72-83.
- 佐竹文子・上野加代子・榎田美雄, 2007, 「児童虐待事例のつくられかた——D. スミス「Kは精神病だ」の分析方法を機軸として」『徳島大学社会科学研究』20号, pp.19-36.
- 高橋和巳, 2014, 『消えたい——虐待された人の生き方から知る心の幸せ』筑摩書房。
- , 2016, 『「母と子」という病』筑摩書房。
- 高橋和巳編, 2019, 『児童虐待防止 支援者のためのケースワーク/カウンセリング ガイドブック』。
- 津崎哲雄, 2011, 「子ども虐待と社会的養護——倒錯と構築と」『こころの科学』159, pp.87-92.
- 上野加代子, 1996, 『児童虐待の社会学』世界思想社。
- , 2004, 「児童虐待問題の鏡像」『ソシオロジ』149, pp.121-126.
- , 2007, 「児童虐待——リスクの個人管理から社会管理へ」『季刊家計経済研究』第73号, pp.33-41.
- , 2008, 「児童虐待の社会構築」京都府立大学福祉社会研究会編『福祉社会研究』9号, pp.3-10.
- , 2010, 「児童虐待の社会学」『小児科』51(2), pp.117-124.
- , 2016, 「『児童福祉から児童保護へ』の陥穽——ネオリベラルなリスク社会と児童虐待問題」『犯罪社会学研究』41号, pp.62-77.
- , 2017, 「児童虐待防止対策の課題——子どもが一時保護になった親の経験から」『社会保障研究』2巻2・3号(No.6), pp.263-277.
- 上野加代子・吉田 耕平, 2011, 「子ども虐待の社会学——社会的責務としての子どもの養育」『こころの科学』159, pp.81-86.
- 浦弘文, 2018, 「児童虐待問題に関して弁護士ができること——コタン及び自治体内弁護士の視点」日本弁護士連合会編『自由と正義』2018年3月号, pp.31-36.
- 山下洋, 2018, 「児童虐待における養育者—子どもの関係性とその障害——アタッチメント形成と精神発達への長期的影響の視点から」『臨床精神医学』47巻9号, pp.965-973.